

平成28年度第1回岐阜県図書館協議会議事要旨

- 1 開催日時 平成28年8月4日(木) 午後1時30分～午後3時50分
- 2 開催場所 岐阜市宇佐4丁目2-1
岐阜県図書館 2階 特別会議室
- 3 会議日程
 - ・館長挨拶
 - ・社会教育文化課長挨拶
 - ・委員長、副委員長選出
 - ・議 題
 - 協議事項
 - (1)平成27年度岐阜県図書館「図書館評価」について
 - (2)平成28年度アクションプランの改訂について
 - (3)平成28年度の取組について
 - 報告事項
 - (1)イベントカレンダーについて
 - (2)メルマガについて
 - (3)杉原千畝展及び講演会の実施について
 - (4)郷土作家展示について
 - (5)紺野名誉館長による朗読会について
 - (6)公共図書館協議会におけるコミュニケーションボードの活用について
 - (7)清流の国文庫の整備について
 - (8)海外情報コーナーについて
 - (9)その他
- 4 委員の現在数 10名
- 5 出席委員等の人数及び氏名 10名
 - 委員長 高橋 博美
 - 副委員長 葉袋 秀樹
 - 委員 梶井 芳景
 - 委員 春日井 一郎
 - 委員 片山 誠吾
 - 委員 金森 さちこ
 - 委員 倉地 幸子
 - 委員 寺澤 裕子
 - 委員 野木 絵美
 - 委員 福士 秀人

事務局出席者

石原館長、原副館長、西村総務課長、谷村企画課長、酒向サービス課長、
多田課長補佐兼企画振興係長、富田リニューアル推進係長、五十川管理調整係長

教育委員会出席者

土井社会教育文化課長

傍聴者 1名

7 議事の経過及び結果

[午後1時30分、副館長の司会進行により、協議会の開会に先立ち、館長と社会教育文化課長から挨拶を行った。]

(館長挨拶要旨)

新しい2年の任期が始まり、今年度から新たに3名の委員に入っていただいた。また、再任された委員には引き続き図書館の運営及び事業にご理解とご支援をいただくようよろしく願いたい。

図書館をとりまく環境は非常に厳しく、大きく変化してきている。インターネットの普及により相対的に図書館の地位は低下しているのではないかという指摘をされる方もあり、また、少子高齢化の中で図書館の使われ方、主として図書館を使われる層が刻々と変化している中で、県立図書館、市町村立図書館それぞれが、これからの図書館のあり方を議論している状況にある。

最近、図書館に関する話題がマスコミに多く取り上げられている。昨年度は、全国的には佐賀県の武雄市図書館の指定管理者の図書購入のあり方について意見の応酬があった。また、県内では、岐阜市が7月に新しい図書館を開館され、多治見市図書館がライブラリー・オブ・ザ・イヤーを受賞された。私どもの県図書館では、昨年7月に満20年の節目を迎え、同時に来館者数が1千5百万人を突破するなどの話題があった。

今年7月に全国図書館サミットが塩尻市で開催され、これからの都道府県立図書館の進む道について議論されたが、この岐阜県図書館も今後どのような方向に進むべきか、この協議会を通し、内側から見ていただだけでは気づかない課題について、外部から見ていただいた率直なご意見をいただいて、今後の図書館運営に活かしていきたいと考えているので忌憚のない意見を願いたい。

(社会教育文化課長挨拶要旨)

県図書館は、昨年度、開館20周年を迎えいろいろな取り組みを行い、併せて今後、県図書館としてどのような特色を出していくかについて議論を重ね、28年度の事業についてはそれらを踏まえたものとなっているが、県の図書館自体もかわりつつある時期にあると感じている。

そのような中で、いろいろな立場でご意見をいただき、今後の図書館運営に反映させていきたいと考えている。

[各委員が配席順に自己紹介]

[事務局から本日の出席者について、委員10名全員が出席しており、定足数に達している旨を報告した。]

[事務局から当協議会には委員長及び副委員長各1名を置き、委員長が当協議会の議長になることを説明し、委員長が選出されるまで司会が進行を務めた。その後、委員の互選により高橋委員が委員長に、葉袋委員が副委員長に選出された。]

(委員長)

[委員長は、議題の協議事項である、平成27年度岐阜県図書館「図書館評価」について、事務局の説明を求めた。]

(事務局)

[事務局から、協議事項(1)「平成27年度岐阜県図書館「図書館評価」について説明]

(委員長)

[委員長は、協議事項(1)平成27年度岐阜県図書館「図書館評価」報告書について、委員の発言を求めた。]

(寺澤委員)

岐阜県図書館は、平成21年度の「岐阜県図書館改革方針」以降、県図書館の意識を持って活動してきていると思っているし、その点を評価している。資料の随所にも「県民」とあって、それが大切だということが周知されてきているものと思っている。

しかしながら、現在の岐阜県図書館はまだまだ「県民の図書館」になり得ていないように感じる。それは、岐阜県には県立図書館は一つしかないこと、県の隅々まで利用が行きわたっているとは言い難いこと、一生に一度も県図書館の利用をしたことのない県民が多くいると感じるからである。「図書館要覧」30ページの地区別登録者数を見てもそれは明らか。岐阜地区80%、西濃地区10%に対して、東濃地区・飛騨地区の登録者は1%に満たない。これでは県民の図書館とはいえないのではないかと。

「来館できない人」へのサービスをどう改善していくか。そのためには、県図書館の専門性を生かしたレファレンスをもっとPRし、有効活用いただきたいと考える。

今回、利用者アンケートでレファレンスサービスの認知度が低いと「図書館活用ハンドブック」が作成され、「岐阜県図書館を使い尽くす」とうたわれているが、この内容も

来館が前提となっている。飛騨や東濃から来館するのは一日仕事となる。メールや電話等でも調査回答してもらえると、来館せずとも利用できることをうたい、さらにレファレンスサービスの活用を拓けるべきではないか。メールでのレファレンスは回答する図書館にとっても利用者を目の前に待たせていないということからじっくり調査できる。私もメールでレファレンスを依頼することがあるが、県図書館は参照した文献紹介も含め丁寧に回答くださり感謝している。レファレンスサービスを重視することは、県図書館職員の専門性育成と専門的蔵書構成構築にもつながる。

レファレンスを重視し、来館せずとも利用できる図書館サービスをもっとPRしてほしい。

また、市町村図書館から県図書館へのレファレンス件数が少ない（「図書館評価」P7）のも市町村図書館をバックアップする県図書館の役割を考える時、気になる点である。

来館しなくても県図書館を使い尽くす方法を市町村の図書館・公民館図書館、さらには各自治体に周知いただきたい。

（梶井委員）

平成27年度の県民一人あたりの貸出冊数が全国平均を上回ったことは感慨深い数字である。県図書館の利用は下がったということであっても岐阜市立図書館の躍進によりこれを押し上げることができることを実感した。今後も岐阜市の活躍を期待するとともに、それに伴って県立図書館のあり方が問われてくるのだろうと思う。

市町村図書館からのレファレンス件数が少ないように感じるという点については、自分の町の図書館では県図書館へのレファレンス件数は数えるくらいしかなかったと思う。利用が促進していく中で、レファレンスを含め、住民の要望が大きくなっていくが、それを受け止めていける図書館をめざしている。しかし、現状はレファレンスに対応できる職員体制ができあがっていないのではないかと、レファレンス件数の少なさにつながっているのではないかと、というのが市町村図書館としての反省点として感じている。

（倉地委員）

数年前、高山市が合併した際に各分館を見学した。その際、郷土の歴史を紹介する取り組みがなされていたが、当時は、県図書館との連携を感じさせるものがなかった様に思う。

県図書館と地元の市町村図書館の間のレファレンスに関してもまだ住民の意識が育っていないのではないかと。

ネットを使えない人が市町村図書館でレファレンスをして、市町村図書館職員が県図書館からの回答を伝えるという体制が構築されれば、多くの方が県図書館を頼るようになるのではないと思う。

（梶井委員）

県図書館を直接利用せず、地元の図書館だけで完結した方がいいという見方もあるので

はないか。また、地元の図書館を通して県図書館とつながっているのであれば、県図書館の立場は非常に有効性のあるものとなる。県図書館の登録者数だけを見るのではなく、関わり方はいろいろあると思う。

また、市町村図書館では、パート司書が頻繁に交代するという点で県図書館との面識が弱くなっていくのではないかと思う。研修にもっと力を入れていただきたいが、市町村図書館の立場からすると職員を研修に参加させることができないという悩みもある。

[委員長は、一旦質疑等を打ち切り、協議事項2「平成28年度アクションプランの改訂について」及び協議事項3「平成28年度の取組について」事務局に説明を求めた。]

(事務局)

[事務局から協議事項(2)「平成28年度アクションプランの改訂」及び(3)「平成28年度の取組」について説明]

(委員長)

[委員長は、協議事項(2)「平成28年度アクションプランの改訂」及び協議事項(3)「平成28年度の取組」について委員の発言を求めた。]

(寺澤委員)

平成28年度の取り組みとして、イベント等企画中心の内容が説明されたが、イベントに頼ってほしくないと思う。昨年度、岐阜市立中央図書館がで、複合施設ということもあって様々なイベントが開催されている。その他市町の図書館での企画も多い。県図書館はそれらと競わなくてもいいのではないか。地道に人を育てる図書館をめざしてほしい。イベント重視の県図書館を利用者は決して望んでいない。

平成27年度に民間有識者3名の企画コーディネーターによる会議が開催されているが、図書館を十分理解した人たちが構成されているのか。館長からもツタヤ図書館の話があったが、民間を活用した指定管理者制度の問題点が明確になってきている現在、図書館の役割・機能がわかっている人たちによって運営してほしい。そして、図書館で働く人たちの力をもっと大切にしてほしい。県の図書館だからこそ企画にばかり走らない図書館の姿勢が大切だと考える。

イベントで人が集まってくるということもあるかと思うが、どのように来る人をつなげていくかの方が大切ではないか。

資料にある「司書と利用者がともに参加するワークショップの開催」とは、どのようなことをして、どのように人をつなげていくのか。

利用者との交流を図るということでいえば、静岡、埼玉、鳥取等の県立図書館では、県図書館大会の形で、利用者、県図書館、市町村図書館、学校図書館、図書館に関心あるすべての人たちが実行委員会を作って、ともに学び、交流している。実際に静岡の大

会に参加したことがあるが有意義だった。一緒になってやっていくことで人のつながりをめざしていただけるとうれしい。

また、館長サミットが開催されているが、県内図書館長の司書有資格者の減少が気になっている。県下35市町36館のうち6館しか有資格の館長がいない。2年前のデータであるが、岐阜県の有資格館長の割合は16%（全国平均が24%）と非常に低い。今年度、中津川市、飛騨市の有資格館長がかわられたので、さらに下がっている。こういう状態で「サミット」が開催されることに対して懸念している。司書資格を有しない館長が多いという現在の状況を念頭においた館長研修を行ってほしい。

(谷村課長)

「つなぐ」ということは重要なことと認識しており、司書やボランティアの方が持っている技能を活用し、例えば古くなった本を直すとか、来館者と絵本を作っていくというようなことをイメージしており、そういったことを来館者に理解していただきながら図書館の利用へと導いていきたい。

(館長)

県図書館のめざす方向として、情報共有・発信型の図書館を掲げており、根本は、図書館がこれまでのように座して待っているのではいけないという思いでいる。レファレンスにおいては、福祉や医療など社会的な課題が見えてきている分野もあるので、その解決に向けて図書館の方から打って出ようということで議論しており、できるだけ前のめり型で、こちらから出かけていって司書が持っている力を駆使して支援を行えるようにと考えているところである。

また、イベントや企画に頼るのはどうかという意見をいただいたが、打ってでるという中で、県政として進めていきたい課題については積極的に情報発信し、また単に講演会を行うだけではなく、そこから図書館に引き込む方法、例えば関連する図書を集めてもっと興味のある人に見てもらったり、博物館と連携による展示を行うことで博物館にも足を運んでもらえるような一連の仕掛けとして実施している。

館長サミットは5月に実施したが、4月に就任された方が多く、館長同士の話し合いは盛り上がり欠けたところもあった。「司書資格を有しない館長」が、という話をいただいたが、そのときに講演をいただいた元塩尻図書館長の内野先生からも司書資格そのものに意味があるのではなく、図書館に対する正しい認識と強い思いが重要という指摘があった。今後は司書に向けた研修だけではなく、館長に向けた研修も充実させていきたいと考えている。市町村図書館職員に向けた研修についても充実を図っているが、市町村図書館の体制も十分でないことから、こちらから出かけていくことも取り入れていきたい。

レファレンスについては、メールでも受け付けているが、PRが十分でないところもあるので、県図書館として全圏域に影響を及ぼせるよう、レファレンスや課題解決に力

を發揮していきたいと考えている。座して待つのではなく、こちらから課題のあるところへ出かけていくなど、積極的なレファレンスや課題解決の方法を考えていきたい。

(片山委員)

池田町の八幡小学校で勤務をしているが、学校の図書館の本を借りる子が多く、100冊を超える子が何人もいる。同時に、池田町の図書館の本もよく借りられている。池田町図書館では気に入った本の紹介文を書くといいものを選んで飾ってもらえる。これを学校もやってみては、と提案を受け実施している。このように学校図書館と町の図書館のつながりがあるが、館長の話聞いて、学校の子どもたちが本に興味をもっているのは、県図書館がモデルとなって、それを市町村図書館が工夫し、私たち学校図書館も利益を得ていると感じた。

数年前、揖斐川町の教育委員会にいた時、揖斐川町の図書館に揖斐川町の学校の図書主任を集めたが、図書主任が困っていることは、学校の図書館の蔵書には限界があるということだった。揖斐川町の図書館としては、まずは町の図書館に問い合わせれば町の図書館から借りられるし、県図書館でもそれができると教えている。しかし、知らない先生もいる。そういったことでつながっており、その結果、子どもにたくさんの本が届き、子どもたちがいきいきと調べ学習に取り組んでいる。

(金森委員)

これまでの意見を聞いていて、ポイントとなるのは、「情報共有と発信型の図書館」、そして「県図書館と市町村図書館との連携」ではないかと感じている。

28年度の取組について2点お願いしたい。

まず、杉原千畝関連で、十数年前から県教育委員会が発行している「マンガで見る日本まん真ん中おもしろ人物史シリーズ」という本があると思うが、3年ほど前から本の厚みが減り、冊数も少なくなっているが、私が勤めている小学校では推薦図書に位置付けているので、このシリーズが復活して、各学校に数冊でもいいので配付していただくとありがたい。

次に、「ルドルフとイッパイアッテナ」の作者による講演会は、タイムリーな話題であるが、学校との連携も必要であると思うので、小学校にチラシをいただくと、学校の方でも集って図書館に行こうというようにつながるのではないかと。

県図書館への来館の話については、やはり地理的にも足を運ぶことが不可能な地域はあると思う。必ずしも県図書館へ足を運んでくださる人がいなくても、県図書館は各市町の図書館と連携を図って、支援をしていくことが一番重要であると考えているので、県図書館の来館者が仮に減ったとしても各市町の図書館の来館者数や貸出冊数が増えれば、間接的に県図書館の役割が果たされているといえるのではないかと。

数年前に出前図書という言葉がはやった時期があったが、こちらから出向いていくというような発信型の方策はととてもよいことだと思う。

これまでに揖斐川町、多治見市、中津川市の図書館の話がでたが、市町の図書館が力をつけて賞をもらったりすることも県図書館の重要な役割であると考えている。必ずしも直接的に関わることがなかったとしても市町の図書館と連携を図り、力をつけてもらえるようバックアップする。これがまさに県図書館の役割ではないかと思う。

市町村のレファレンス件数が非常に少ないという話があった。私も地元の図書館のレファレンスを活用しているが、満足度は高い。市町村図書館は県図書館に聞かなくても自分たちの中で問題を解決する能力が備わってきているからではないかと思っている。

(寺澤委員)

館長から「打ってでる」という話があったが、企画をやる場合は、県図書館のあるこの場所だけでなく、飛騨地区や図書館が少ない加茂地区で開催することも考えてはどうか。今回の「飛騨美濃合併140周年特別展」は飛騨地区でも開催されるのか。県内には8つの図書館未設置自治体があり、杉原千畝生誕の地、八百津町もその一つ。県図書館の杉原千畝企画を契機につながっていける機会になるのではないかと思う。

また、図書館未設置自治体には公民館図書館だけでなく、行政に出向いて図書館利用PRを打ってでももらえることを期待している。

(薬袋委員)

現在の日本は、人口減少、高齢化、少子化、不況の状態にあるため、公共サービスは供給も需要も減少するのが普通である。したがって、貸出冊数等も減少するのが当然で、現状維持であれば、増えていると見るべきだと思う。

「情報共有・発信型図書館」のコンセプトについて、昨年、大変有意義だと思うと発言した。私は、県図書館は、課題解決支援に関してよい取り組みをしてきたので、これをウェブサイトを通じて普及することによって、「情報共有・発信型」になると理解していた。

ところが、今回の様々な取り組みは、基本的に来館者に対する事業のようで、ウェブサイトを通じて、どのように「情報共有・発信」が行われているかが明らかでないと思う。

様々な事業の内容をウェブサイトでも報告していただく必要があるのではないか。つまり、図書館の来館者に対するサービスとウェブサイトの利用者に対するサービスがあるのだと思う。できれば、アクションプランや事業報告などの中から、ウェブサイトでの活動や事業を抽出して、まとめて報告していただけると、ありがたい。

講演会や展示会に関する情報発信については、佐賀県立図書館等で、ブログを活用し、気楽に見られて、臨場感のある報告が行われている。講演会であれば、講演の要旨を掲載し、できれば音声聞けるようにする。展示会であれば、写真を掲載する、というように、ウェブサイトでも展開していただけると、「情報共有・発信型」になると思う。

私は、東京都民で都立図書館を利用しているが、普段はもっぱらウェブサイトを見て、資料を検索しておき、時々図書館へ行ってまとめて利用している。多くの県民にとって、県立図書館は来館するものであるが、ウェブで見るものでもある。

限られた予算で効率的に活動を進めるにはインターネットをフルに活用するとよいと思う。県図書館のウェブサイトは非常によくできているが、実施した事業の成果をブログなどを使って発信することについては工夫の余地がある。

県図書館の利用者を増やすにはどうしたらよいか。図書館だけ見ても打開策は見えないと思う。私は、インターネットを使って情報発信する人を増やすことが効果的だと思う。ブログやウェブサイトで情報発信する人を増やせば、そのために学習や調査研究が必要になる。インターネットだけでは調べ物はできないので、最後は図書館に行きつく。そういう人を増やすことが県図書館の利用者を増やすことになるのではないかと。これが岐阜県の発展につながっていくと思う。

県行政全体でインターネットを使って情報発信をする人を増やせば、自然に県図書館の利用者も増えると考えている。県の振興策として考えていただきたい。

(富士委員)

図書館に引き込むための方策として、大学では新入生に向けて毎年4月頃に図書館ツアーというものを実施している。大学図書館ともなるとそれなりの規模があるが、利用者が体系化された本の並びなどを理解してうまく利用されているか疑問があり、特に新入生は所蔵図書を理解しないまま図書館に来たり、図書館の存在すら知らない学生もいるので、強制的に1時間ほど図書館の中を探検させている。従来は図書館の職員が行っていたが、ここ数年は学生と意見交換をして、実際に利用する側から見たときに、新入生が一番使うのはどこだろうかとか、使い慣れて要求が高くなってきたときにどういう使い方ができるのかを探るツアーとなっている。

県図書館を広く理解してもらうため、図書館を実際に歩いてみて、どこで何が行われて、どこに何があるのか見てもらい、場合によっては一日職員となって働いてもらうことで図書館に対する理解が浸透していくのではないかと。リアルにできないのであれば、仮想的に県図書館をウェブ上で探検するといった仕組みも可能だと思うので、このようなことを含め図書館と利用者との間を縮めていくとおもしろいことができるのではないかと。

図書館の位置付けは全国的にも難しいところに来ていると感じている。特に大学の図書館では、学術雑誌がよく利用されるが、多くは電子化されているので、図書館に行かなくても仕事ができる状態になっている。そのような中で大学図書館の意味合いはどこにあるのか見直している状況にある。地域における県図書館の役割と各自治体の図書館や学校の図書館とのつながりをどううまく組んでいくかが重要になるかと思う。そういった点では県図書館は中核になる図書館なので、各地域の図書館とお互いを補いあったり連携することによって県民に対する文化的なサービスが非常によくなると思う。

(倉地委員)

美術館や博物館と連携して講演会やパネル展を実施するという説明には心を動かされた。これまではそれぞれとの連携がなくもったいないと思っていたが、最近は図書館から積極的に連携した企画をしていただいている。講演会等の情報を高校生や中学校にも提供をして、未来を担う子どもたちに一流の先生の話が聞ける機会を今後も増やしていただきたい。これをさらに広げていくためにはウェブで聞けることも必要ではないか。

現在、開催されている飛騨美濃合併140周年特別展について、オープニングの時に博物館の方から解説を受けたが、資料を見るだけでは分からないことが説明を受けることでよく理解することができた。解説がいつあるのか分かるようになっていないのか。

(谷村課長)

学校回りについては、将来を背負う高校生や中学生に向けてチラシを配布し、一人でも関心のある子どもたちに来ていただけるようお願いをしている。

展示の解説の実施日については、チラシ及びネットでご案内をしているが、もっと回数を増やしていければと考えている。

(福土委員)

職員による解説もよいが、ボランティアの方に展示会等の前にしっかり勉強していただいて、普段はボランティアの方に質問の受け答えをしていただき、高度な質問があった場合に職員や専門の方が答えることにすれば、来館者も気楽にいろいろ聞けるし、高齢社会に対する活動の一環になると思うので検討してはどうか。

(梶井委員)

セット文庫について、ホームページ上では、市町村図書館や公民館図書室を通して貸し出すとあるが、具体的な貸出の方法となると学校から直接申し込むとなっている。

市町村を通して借りることで市町村の支援になると思うが、直接借りる色合いが強くなっているように思うので一考をお願いしたい。

(寺澤委員)

他の文化施設との連携の話があったが、文化施設だけでなく、病院や保健所等医療保健機関との連携もできるのではないか。

その際、県図書館のパスファインダーをもっと活用してはどうか。

(春日井委員)

現在の活字離れについて、出版業界では本を手にとってくれる若者が減っていることに危機感をもっているが、資料を見る限り県図書館としては影響がないような印象を受

けたが、危機感はあるか。

(館長)

活字離れは大きな問題であるとは認識している。県図書館では、読書歴を記入する「読書通帳」の県図書館を含む全公共図書館での導入や、読書体験を他者に発信してもらう「おすすめの一冊コンクール」、その他にも「ビブリオバトル」や、司書によるおすすめの本の紹介も取り入れた「ブックトーク」の開催など様々な取り組みによって活字離れに歯止めをかけていきたいと考えている。

(寺澤委員)

情報公開と民意にもとづく図書館協議会が機能することは非常に大切だと思っている。

平成21年度の図書館改革開始時には、図書館協議会のあり方についても広く公開されていくことが検討され、傍聴や協議会委員の公募などとともに協議会議事録の全文公開が実現した。これを読んだ人からの評価の声も届いている。

ところが、昨年度から「議事録」が「要旨」となり、館長、社会教育文化課の発言などもなくなっている。実は、事務局等の挨拶・発言からも県の図書館政策や方針を伺うことができ、大切な記録だと思う。協議会議事録を担当される事務局の方にはお世話をかけるが、ぜひ全文公開に戻していただくことを願います。

(委員長)

[委員長は、協議事項に対する質疑意見を打ち切り、各委員の意見を参考に事業を進められるよう事務局に依頼し、報告事項の説明を一括して求めた。]

(事務局)

[事務局から報告事項について説明]

報告事項(1)イベントカレンダーについて

(2)メルマガについて

(3)杉原千畝展及び講演会の実施について

(4)郷土作家展示について

(5)紺野名誉館長による朗読会について

(6)公共図書館協議会におけるコミュニケーションボードの活用について

(7)清流の国文庫の整備について

(8)海外情報コーナーについて

(9)その他(ぎふ森の恵みのおもちゃ美術館について)

(委員長)

[委員長は、自由発言を求めた。]

(野木委員)

これまで地元の図書館しか利用したことがなく、県図書館に初めて来て、いろいろなサービスがあることを知ったので皆さんに周知して行ってほしい。

(倉地委員)

県図書館応援団といったような利用者側も集まって話したりできる場を作りたいと思っているので、できた際にはお力添えをいただきたい。

(委員長)

若者の活字離れ対策など、県図書館の取り組みや役割に期待しているので頑張ってほしい。

(委員長)

[質疑、意見等他にないことを確認し、今後のスケジュールについて事務局に説明を求めた。]

(事務局)

[今後のスケジュールについて説明]

次回の協議会の開催は、平成29年2月下旬の開催予定。

[本日の協議事項の審議がすべて終了したことを確認し、午後3時50分に閉会宣言した。]